和一
諸國物語
仲尚
版權館善書

特64
596

明治二十年一月十二日内務省交付 2300

東

へ先免書肆ですが書物代を戴きに参りましたア、左様でせかド来月までヤイ仏の顔を三度モウ此度も勘忍かゝぬと据そこで書肆の言れるにナニト飯沼休和尚の話を出集て見れば書物代も堪へてやるとの事る私しも金にふる事ふとてく和尚の話しをかき集め書やの主る渡し帳面に長しの字を

蜷川新左衛門
問
極楽へは
如何して
わくや
一休和尚
答
斯して行とて口を手ふて圖の如く

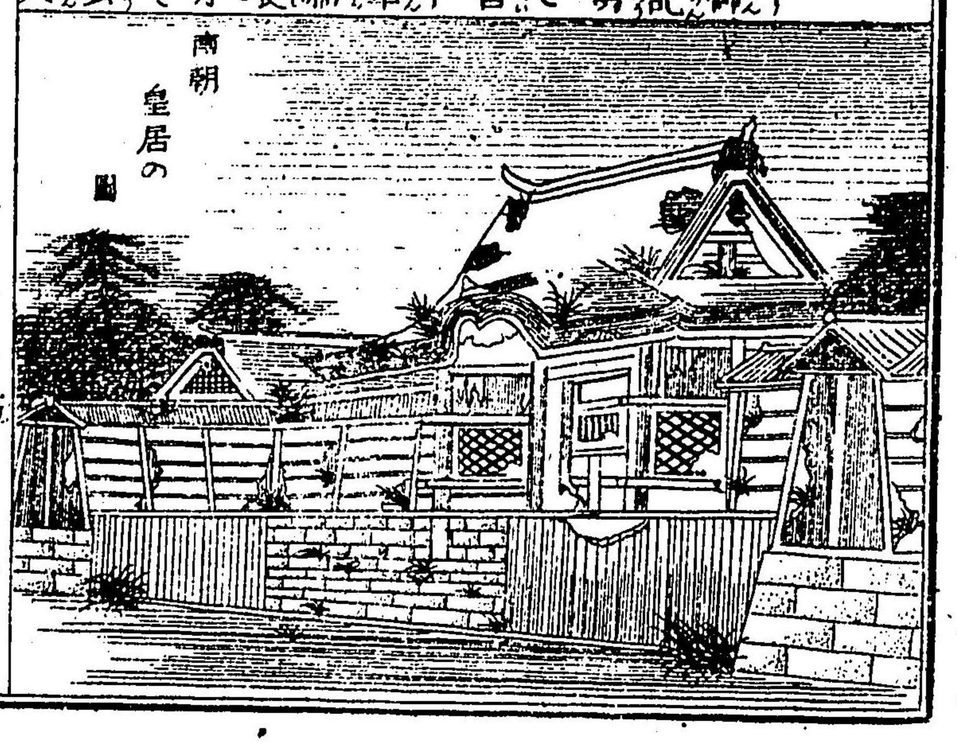
横ゑ引を黄ひまし多ことを其侭に記し置くも直ふる心地まて

明治の十有九師走初の日

浪の華くもの庵南窓こて

編者識

治乱興亡ハ來暑の交る相往来するが如しとゝや茲ハ人皇九十五代後醍醐天皇の御時北條高時足利尊氏等の逆臣興り屢々乱をちゝ終ふ尊氏新ふ院宣を申し下ゑ光明院を奉ゞて實位ふ付奉り帝の遷行を催せしゝバ吉野ふ潛幸ゐりて更ふ皇居を経營し玉ふ是を南朝と云ふ足より皇統分破して帝崩御の後ハ山院ふ至迄四世五十餘年南北互ふ并吞の勢をちゝ玉ふと雖氏の一族命を授けてより南朝ハ日々衰敗ふぞ及びゝる斯て人皇百一代の帝後小松院と申し奉るハ後圓融院の皇子ふて通陽門院と申し奉る内大臣藤原の公忠公の御小女ふて渡らせ玉ふ然るふ帝堅徳天



南朝皇居の圖

ふ脉一地ふ則り玉威四海を光らし朝憲正しく怠慢ふ有りしが八荒皆ふ風を望て靡き始めて四海大平の御世ともふ礼り於是帝南北両朝の人民久しく干戈ふ苦しめるを哀憐み玉ひ御和睦ありて至治の恩澤を蒙らしめんとの叡慮ふて明徳三年九月廿五日大内左京權太夫義弘を使として吉野へ御和平ふ奏遵ハさ礼るやのて御和平の儀調ひ四年閏十月二日南帝都ふ還幸ふ成りて嵯峨大覚寺へ入たまへバ過し建武の頃より早晩か堅運開け再び堅代ふ復し玉ふべきやと世々の帝宸襟を脳し玉ひし今も枕頭一片の御夢とふりて先帝の叡慮を継ぎて玉ぎるも御恨ふきふし礼有ぬ共微運の御身ふ礼バ空しく遵鄙ふ朽果玉もんより都近く還幸在しても遥まさ礼玉

南帝京都へ御還幸の圖

へりと喜悦の叡慮斜ちふ吉野の皇居ふ隨ひ奉りし公卿后妃の方々ふ堅代ふ復し玉ぎる夏を歎き玉へども年頃愁しく思ひ都の花ふふ堺り玉ひて昔びの色をぞ顕し玉ひける

其下

偖て其後勅命ありて南朝ふ隨ひ奉りし人々も各々旧宮を授け朝位ふつふ祢玉へむ諸官其堅德ふかびき敢て異志を抱くものもなく各々忠勤を抽もげみたる程ふ南帝大覚寺ふ穏坐ありると虫ども今迫朝暮参集の諸卿ふ朝事ふ違ふくして参殿を賀り従ひ奉る者とて両三の待臣四五の宮嬪のみ是迎ふ朕の不德のかず処かりと叡慮を宥ぬふ礼残りし宮嬪ふも御暇賜せり小倉の麓ふ幽ふる御庵を結バせ玉ひ世愁を覩し

て只管ふ後世の供福をぞ願ひ玉ひける然ふ暇賜りし宮嬪の中ふ藤侍從とて右馬の頭藤原の顕紀の女子ふしておもせしが倉の皇居の寂莫なるを見るふ付聞くふ

ても哀感悲痛の情ふ堪へず倩ふ思ふよう假令へ御和平ありとも正しく皇統を継ぎ玉ふ御身なれば太上法皇の御位ふも備へさせ玉ふべきふ両三の待臣と山麓の閑居ふ後ぶせ玉ふよ悲痛おしなる見よ〳〵殺一計を施し玉座ふ咫尺し夫ふ在す先帝の霊をも宥め代々の忠臣地下の鬱望をも慰むべしと志堅固ふ定め其便宜を待ち居たりしが主上の御母通陽門院の女房一人闕しとて洞院實世卿徒從をすゝめて其数ふ入ふしむ徒從疲りちく打悦び日頃の本懐を遂るも此の時ふり程よき會を窺ひ居よる

其年の三月半む門院数多の女房と李花の御宴を遊むされるの徒從も御宴の席ふつふふり管絃を奏し和歌を奉り雅興を添へ玉ひしが主上御感斜ふふ四更ふ到て深宮ふ還御し玉ふ門院ふも侍從ふ斯る異心のある事を知り玉ひ其夜主上の侍從を率し玉ひし状ずも密ふ聞のせ玉ひ後宮ふ薦めて嬪御の数ふ入へ玉ひぬ是ふ由りて始めて後宮ふ入事を得て今一日も猶稼ぐ事を行ふべしと一夜人静まりて後熟て設置くるヒ首を携へ密ふ寝殿の程近く伺ひ寄りて宮中俄ふ人音頻ふ水む折あしく闇房へ帰りぬ

貴久唐誕生の話

此時主上寝殿ふ入らせ玉ひしが天文博士安部の安信天文を見るふ一條の陰氣紫

貴久麿誕生の圖

敏の帝座を犯す事急かり正しく後宮ふあるふ異志を抱くものゝあるかりとの奏聞ふ大驚き玉ひ宿直の諸卿ふ勅命ゝのりて後宮を捜さしめ玉ふふ藤侍従ヒ首を懐ふせしゝむ怪しみ思ひて其故を親ふ勅問ゝのりしふ侍従少しも畏れず先帝の爲ふ恨みを報ひ奉るべき志の趣きを動き主上其志を御感あり今皇統一ふ帰て先朝の旧臣と雖も朕が爲ふ忠志を尽す時ふ当り独先朝も忘れ朕を犯さんとするの志世々の弄史ふも未曾のゼざるの烈婦其罪を宥して思儀を厚ふ賞すべしと直ふ河院賞世卿ふ云々の次第を宣旨ゝのりて下し賜ひしゝむ実世卿を始め諸官の面々仁徳の廣大なるを感激ゼぬもかゝりき其後侍従ハ薩摩の思ひ立

ゝのりと虫も畏ふ南帝の恩幸を受たる時たのふゝも胎を受て心地常ふふねむ暫く其事を止まりしゝ月満て一玉子を誕ず然れ共其身いやしきを深く秘して世ふ洩ふさゞ是れ時ふ應永元年正月十八日の事ふてありし安君即ち藤の侍従ふも最早や王尊の御胤をもつゝゞふく分娩し奉る上も有りて甲斐かき我身の上と覚悟をきゝめ正ひ一日看病の人々の透を伺ひ思ふゝのふまゝを書残し置ヒ首ふて喉を思ふまゝふ突つふぬき夜半の嵐と消失ゼ玉ひぬ呼々其烈尊むべし亦悲しむべし斯くて侍従ハ病死の趣きふ比露ふし厚く之れを葬り産所の男児ハ正しく南朝の御胤ゝりと虫ども主上の賢慮を累さんも最かしてたれむ之を

し秘して育てられ処ふ洞院実世卿の
問僚藤原の朝臣爲貞卿の第二の男子生
産のりしも月をへずして世を去り玉ふ
幸ひ家ふ云々の緑故を告げ送りな
れば爲貞卿大ひふ悦び玉ひ貫久麿と名
づけ玉ふて愛しみ養育し玉ふ是れ後ふ
一休禪師と云ふ高徳の大和尚となられ
たる人なり

貫久麿出家の話

梅檀も二葉ふて馨し聖人ハ生れながら
ふして之れを知るとあや去る程ふ貫久
麿も稍々年長するふ隨ひ聰明宏方ふ
て遥ふ群児の上ふ出で讀書文詳を玩ぶ
の外自餘の遊戯ふ心を留めず八歳の時
父の卿紫野の真珠庵養叟禪師と法味を談
せられしを屢々側ふふて聞き天然の機

貫久麿
菩提心を
起して
紫野ふ
至る
圖

十二

相應する所やはり々を禪師ふ從ひ僧とならん事を請ふと重ね父卿是を免し玉も
ぐ由りて一夜密ふ家を抜出て真珠庵ふ到り自ら禪師ふ志の趣きを述ふる禪師大ふ
悦び遂ふ庵中ふ止め置て爲貞卿ふ請ひ受けて諱を宗純と改めて雛僧とおきれぬ

〔編者曰く以上第一回より宗純と云ふ小僧ふちなく迫の事実ハ蘇亮著述の一体諱ふ見へなり
亦編者曰く是より以下往々聞者の欠有り其が中ふ狂句或も狂詩等散在せるも元来詩歌
を皆ふ禪機の奥義を解しるものふて其意廣大なるものふれば假りふ大要伐摘解し置ぬ
るも間々錯語おさふあらばさて編者の至ふざるあり看官之を恕せよ〕

さて水む宗純も資性頴敏ふして末だ三年を過ぎるふ経論祖師の語録等大半読み得た
るのみならず禪機口戈人の目找驚かし事しむ〜ありしが師もいと〜之を悦び玉
ひ種々の問答をふしふ其答殆水の流るゝ如くなる程ふ庵ふ出入する竹齊と云ふ
者いりふして也一度困らせてんとて一日〔紫野丹波ふ近し〕と五言ふ二つの地名二つ
の色字を聯ねたる難句をあけしふ宗純声ふ應じて〔白河黒谷隣〕と次しが竹齊其一句
ふ言ひ伏られ詞ふくして逃げ帰れり此人幼ふして妙才あり唯人おふぐと皆舌をふ
るいとおん

宗純幼ふして頓戈ある話

又或時竹齊と云者器ふ封を附け上ふ有の無の記したるを養叟師ふ参らしとて持来

二

十三

り宗純を顧み遣て何と問ふ有無の二つも本是一つと答ふ然らば数も何個ぞ七つ八つと答へしが其も違ふたり梨十五個ありと云ふ宗純七つ八つを合せて十五あらじやと答ふ

「言の葉ふ花の作意の七つ八つあをいわれらもいひのひもち」

と云ふて禪師共手を打て笑ひけり○亦或時禪師粘を壺より出して喰ひ居るゝを宗純見付共も何ぞと云故汝が如き小僧少しふても食ふ時も忽ち死するありと云ふて取置れたり宗純師の出らるゝを待壺を取出しさまふ棚より取落し微塵ふかし先づ二三杯食ひたる処へ師も帰られぬれば宗純しみ〳〵と泣く師何事ぞと問ふ師の大事の粘壺を打破りし故申訳ちきふ粘を喰ふて死ちんと思ひ候へ共今ふ死ぬ申さじと云ふ師も言葉ちく打笑ひてそおわしたる斯て宗純十五戈ふ及びしが師の毎夜寒疾ひの養とて干鮭を食たるゝを見て宗純魚鳥を食ざるふ佛の戒ふるふ道の物を食ひて妨げちくバ純ふも分ち下さるべしと云ふ師貧道も先づ引導して用る故妨ちしと云れゝバ宗純然らば引導を聞んと云ふ師鮭ふ向ひ

「汝元来枯木の如し一活とも共徴ひ水中ふ遊ぶ事能もじ為ふ愚僧ふ喰れて仏泉を得よ喝」

と云て喰るゝふぞ宗純明朝起立て早々一匹の鯉を買ひ来り味噌汁の中へ切込んとするを他の小僧共見て斯と師ふ告れゝバ師立出声をもげまし宗純汝仏戒を破し

て活魚を殺す一勺ふむ許さん言得ず一棒の下ふ頭脳を砕のんと云れしふ宗純懼れたる色ふく鯉ふ向ひ

汝元来生水の如し一活きんとすれバ逃げんとすれバ水中ふ遊むんより去ら愚僧ふ喰れて屎とかれ喝

と云ふ侭寵ふ押當てぐさぐと沸へたる汁の中へ切り込しりバ師杖を投捨て善き引導ふりのち前夜の干鮭も屎とかり今日の鯉も仏屎を得べきぞと賞られしと埃

宗純鞠を一体とよぶ話

或時宗純使ふ行んとせしふ駆ふ空極嬰り闇怖しく覆ひ今ふも両の降り来る景色ふ宗純両眼もかく行のんと成を師も引止め両眼を持て行と云れしらむ宗純ハ

有漏路より無漏路ふ埒る一休み

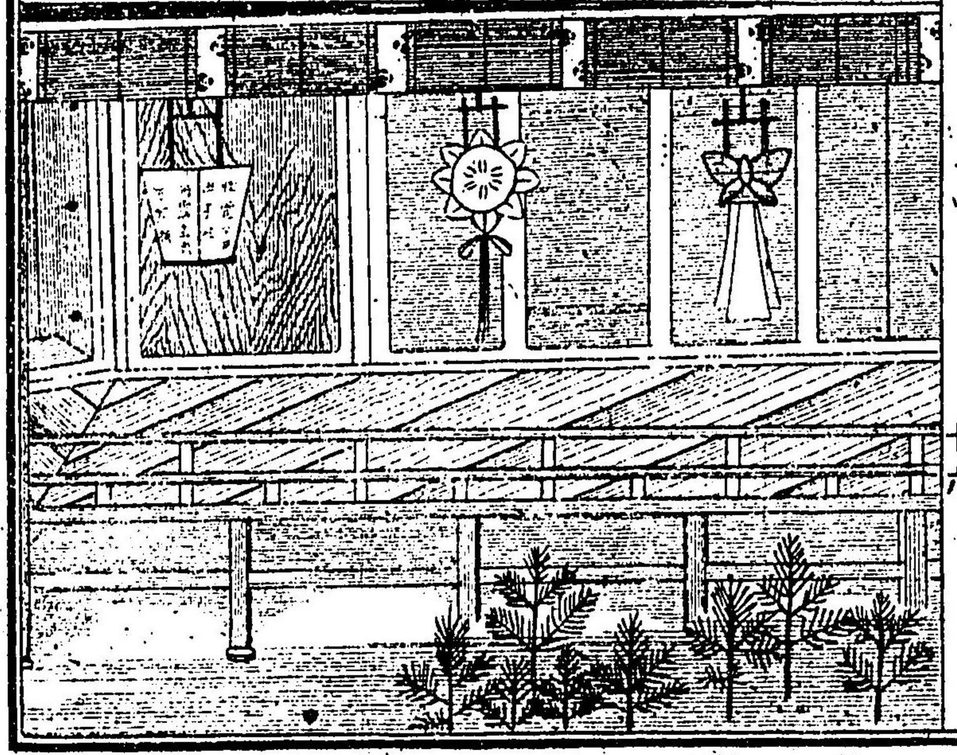
雨ふらバふれ風ふらバふけ

と口號めむ禪師大ひふ悦び汝ゲ程の心
ゆふむ雨具の設ゼざるも理ちり今より
號を一休とし〳〵と許さる側ふあり〳〵
もの一休ふ向ひ歌の意を問ふ人間の
此婆婆ふ有間むもづらふて一休の内の
の事ふれバ雨のふりても風の吹ても
まわらぬとの事ぢや

一休紫野大德寺眞珠庵

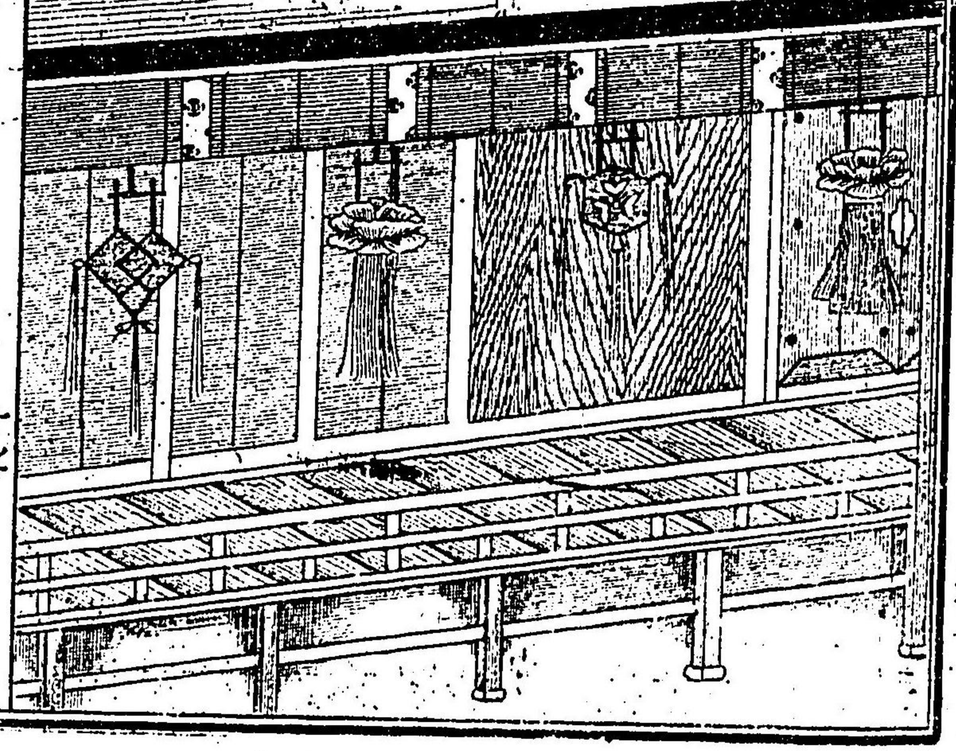
凡主とふらるゝ話

斯て許多の歳月をへて養叟禪師老病ふ
て遷化ゆり〳〵時遺命〳〵て一休を法嗣と
定めらる一山の僧侶一休の宏才を知ら
ぬものゆのり〳〵ハ曾て擬議を抱く
のゆく大ふ事をきまりて有〳〵其頃の



時の風として毎年七月十四日ふむ洛中
の諸寺諸山より大内へ性靈の供養として
燈籠を奉る慣例ちり〳〵殊ふ巧みふ美
ゆると爭ふて奉る事とゆり今年ハ當院
も如何ゆる者を造らんと評議まちく
ゆるを一休進み出で今年ハ我ふ任すべ
〳〵との事ふ一同安心〳〵て居とる内最早
其日ふもゆりんれバ一休和尚自作の最
見ぐるしき物を持出で玉へバ皆々大ひ
ふ驚きたれども今更詮方もゆきまゝ持
行て懸け置とるふ和尚一首の狂詩を書
付置れたり

性靈今日出來迎　兩露直供萬葉棚
桃得燈明天上月　柏風流水讀經声



鴨川ふて性靈棚を見ぞ
圖

終ふ是の事敲聞ふ達し御感斜かゝ宜示下りて明年より其事止ぬ或る人其事をき、一体和尚の意斯ならんふも必ず慶中ふも性灵會ものるまゝと尋行て一体ふ問ひけれむ和尚云れけるふも否々我ハ俗と事変り三界の衆生有縁無縁を祭る故最手廣かる性灵祭ふて候と云る故然らバ拜みこゝと云ふ最易か夏かりいざ参られよと先ふ立ち行のるゝふぞ何処のと思へむ鴨川の邊り迫遷丸行一圍の圍を指して是ふり見られよと云るゝふぞ一向ふ意つゝぬむ何処ふて候哉と云む然らバ御目ふ懸申さんとて山城の瓜や茄子を其侭ふ手向とふれや鴨川のみゝと口號み玉へむ皆々手を打て笑ひとちん

横死サ導の話

斯て一体和尚ハ活仏ふりと云もてもやゝ其中ふ増て引導を乞ふも数才く一年度の頃漫雲勢を蓋く蒸暑日を重盆を傾くの如き大雨ありて鴨川の水嵩まさり俄ふ大水とふり川添の家々も壁穿て柱もるまり旧家もさゝがふ毀てゝ激流ふ押流るゝ狀を見物ぜんと罵り合ひ川岸ふ彳む其中ふ二十歳むりの女同士三人ふど見物して居さりゝが何とゝんん一人の女川岸俄ふ崩れ逆巻浪ふ落込ゝふゞあゝやと云間ふ押流され躰も見へぐちりゝふバ残る二人の女共大ひふ驚き斯と其親共ふ告けれバ周章ふさめき川岸ふ縋ひて尋ね出せゝが最早事切て有ゝふバ両親の歎き一方ふらぐ併し常

小女川へ落る
圖

葉とも云乍ら不便の横死の変ふれバ未来も定めて覚束ふーと思ふ故可然名僧の引導を願さーと語る折ふー一休和尚通り掛られーを是幸ひと右の趣きを述て願ひたれバ和尚不便ふ思ぎれ然らバ引導ーて遣さんと彼の死屍を以前ふ落入ー川岸ふ運させ川船をとめて逆瀬の波枕浮世の夢を見習ーの驚かぬ身の果ふさよと謡の文句を二三遍くりのべて唱へて屍の襟元を取りて川中へざんぶと投込て見返りもせず帰られけれバ跡ふて皆々一休和尚を氣でも狂ひさるふらんと早々取上げ外の法師を願み引導ーて埋が其後より妻子共さまぐふ怪きを夢みたるも一休の御引導ふて誠ふ昔き

処へ浮みーをふーふき土人の引導ふて引戻さ水中有の旅ふ迷ふとりと夜ふ梦み果を幻ふ立顕るゝふそ今を始めて妻子共口悔ふー一休和尚の庵ふきさりて斯と歎くを和尚不便ふ思ぎれやがて亦埋ー死骸を堀出きを以前の川岸ふ持を行

大水のきをふ流るゝどちのらも身を枠てにを浮ぶ瀬もあり

と口跡玉へ川へ投込帰られるふ其夜親子の梦ふ顕りがさき御引導ふて今を浮みとりと云ふて白粟ふ打のり西の空へ行けれむ人々大ゐふ悦ーとちん

大俗引導の話

江州堅田の浦ふ彌五郎と云ふ船頭一人ありたるをのが業ふのら賊いとふみふや

やつれても一生のま徳の禊群の枕をそむいて眞の道にうとくして心ざしきおのら爽の九里の花ふあそぶ聲ふも遥の物りおのづから賤しきふ憤て羨じのるべし夏を驚ら〳〵頻ふふ尊きもへを恥て止ぎりたれば最浅間敷よすがかりたるが遂ふ身まりて死ふたる妻子〳〵といかだく事かぎりおく偖あるべきふあらざれば火ふやせん上ふや埋んと悲みたるせめていらかるる知識をも頼みて後世のくどんを助たきと思ふ折ふら一休風雲の行衛思〳〵めして浦の方ふまをりぬて四方の狡景を乘みておもします処ふ妻子ども見て衣のすそふすがり只今かやうの浅間敷ものゝ相果て候のあもれ御ひをされて彼の者の後世のくるしみを導きて玉も水のし生々の厚恩ふて候べしとのなしみたる一休ふびん思しめし例より哀き事ふり引導きづけて待さぜんとて此家ふきふり玉ひ身し玉ふ様こそふしんふれ死人を米俵ふつゝめよとて俵ふ入て縄をらけ九太船ふのきのぜ湖水の波ふうらべ沖ふ至りて声をあげて高らかふ宣ふ

此俵を果れ元来米俵ふもあらば豆俵ふもあらば汝もかとの彌五郎

俵ふり江河ふ沈で鱗の餌とふ仏果を得よ喝との玉ひ水の底ふぞつき入たる是成仏の引導ふり

一休和尚元日ふ髑髏を携へふる話

正月元日より三ケ日の間ハ一天四海賢きも愚かも愁ある も愁ふきも貴きも賤しきも屠蘇白散ふ茶磨泥ふりとも鬚ふ掛け御覧すハると尻餅ふりとも搗きて悦ぶふ一休和尚ハ元旦早朝墓原へ行きて髑髏を取り杖へふ貫き浴中を御用心〳〵とて門口をのぞあせ歩かれけれバ人々忌てしく思ひ跡ふて油石灰場門口ふど洗ひ清め居こりしが或人立出て一休ふ向ひ御用心とて尤至極の事ふて斯様ふ美を尽しても早晩此の髑髏の如くふるものふれ共世の習とて今日ハ皆〳〵悦びあへる處へ斯るむくつけき事ハ御遠ひふすやと云ふふ和尚否〳〵我ハいてひて此ものを出ふり夫れ目出度と云ふ事ハ　天照太神より起ると虽も是髑髏より外ふ目の出ぬるものふ

〳〵とて

〳〵くげなき此されかうべあなかしふ目出たくかしくこれよりハなし

是見玉へ人々目の出たる穴のこのこりしふそ目出たしさいふなるぞ皆人今日とくらして飛鳥川淵瀬つねならぬ世なりとハ変ふもしらぬゆへ今ふも斯くなるぞと御用心〳〵と申なりと云ふれけるとなり

一休様物ふ賛をせちるゝ話

其頃土佐守とて畳の名人ありしが或人畳を頼ふふ行しふ土佐氏いたく酒ふ酔て前

居もしちで居ちれしを強て頼しかた是非なく筆をとりくるくとまハし刷毛よて波の狀の線を引きて渡されけれバ持歸り見れ共何とも別り兼ぬるゑぞ或日土佐氏ゑ尋ぬしかど醉中の事よてしちず云ゑるゝゑ詮もなくしてありしが之れを一休和尚ゑ持行き賛を乞ハゞやと心付和尚の庵ゑ来り頼みけれバ和尚熟くと御覽じて之れハ何とも別ちぬどのそゝなれバ賛して遺さんとて

水中ゑ一物ありその一物を問へハ書をし書工もしちず持主もしちず賛する我ハ猶しちず

と遊しけれバ之れを見る人聞く人ゞ直なる御心のやとて無二の掛物となりて今ゑ於て傳ゑりあるとなん

一休和尚章尖好物ノ話

和尚ハ蛸が御好物よて或日徒然のなぐさゝゑ蛸を買ゑ遣ハされしかあまり使の遲さゑ

さのたびハいそぐといふよながそでの蛸の入道くちの遲さよ

と遊しける処へ蛸四五ゑい持来りけれバ一休悦び玉ひ此蛸むざくと食たんも無殺なりいで引導して食ゑんとて

千手觀音蛸手羮　斬懸柚酢拜如何

とて柚酢をかけて大ひゑ食ひ去る檀方へ行き酒肴分まいちれけれバ吐逆なされけるを人々見れバ皆蛸なれバ大ひゑ驚き和尚ハ生佛の樣ゑ思ひしも蛸をまいりしか扨てなまぐさ坊やとあざけり笑ふを聞玉ひ否やくゝ我ハ蛸を食いし事なしと云ハるゝゆへ人々現ゑ蛸を吐き置ながちあふがひ玉かと云へバ我ハ口より出たりとも食たることなしされバ其食ざる証據を見せんと皆なくゝ引連れ百万遍へ連れ行き誇導決然の書像を見せあれ見玉へ人々善導口より阿彌陀を食ひしとなけれ共口より三尊出玉へり善導さへ食ゑざるもの口より出る制し難しまして愚僧の如き食ゑさん蛸の出る事せん方なしと云ゑれけれバ皆人々其頓智を驚きけり

一休和尚の食れし魚水中ゑ吐出し生る話

他禁戒任老粉迦

扨和尚ハ生佛まてをとすれバ魚を食して水中ゟ吐き出し玉へバ魚忽ち元の如く生るとて浴中の者事ち云い合へり或時和尚聞ていしめし浴中の辻々ゟ高札を揚られける其詞ゟ

来る何月の日さかり桙のほとり紫野ゟ於て魚を食ひて其儘もとの魚ゟ吐き出し水中ゟをどりしむる事なり御望の方々御見物ゟ御出待奉る

大夫ハ天下老和尚　一休大禅師

と書れけれバ浴中の人々是れを見て扨ハ人々の云ひしゟ違ず斯く自筆ゟて書るゝ上ハ偽りなしいざ見物せんと其日ゟもなりぬれバ庵の景内所せき迫詰かけたり和尚時分ハよしと大盥ゟ水を盛り出さしめ其前ゟ魚を料理して御前を出さしめひた

〳〵と食ひ玉ひ躾て大盥ゟ向ひ喝々との玉ひしだし目をとじて居られしが見物の者ハ今や生きたる魚ゟ吐かれるかと和尚の顔をじつと打守り居たるが和尚申されけるハ各方ハるゝと御出て下され一きゟ見事ゟ吐出し御覽ゟ入れ度存ずれども中々今日ゟ吐かれ申せ叡ハ是非ゟ及バず屎となりとも致し申さんさちたとて奥へ入り玉へバ皆なゝ聞しゟ優るをどけ御坊のなとて立去る其が中ゟものゝたる人ありて云ひけるハ只今参りたる魚ハ皆淵ゟをとるなり有難き一言や邪誠ゟ正法ゟふしぎなしと受玉たりしゟ人の余りほめんが爲めゟなき事をいふ已そしるゟ當ゆへ其理を示し玉ふ有がたしゝと云へバ人々夫ゟ心付大ひゟ感しあへり

大俗問答の話

或時和尚の僕思ひけるハ和尚ハ智識者とて名高き諸方の人の尋ぬ来るを聞けバ皆なゝ二口三口の問答のとなりいで我も問て見んと或日和尚ゟ向ひ男と申すものハ生れ出ると珍寶といふものを以て居りますが成人して落す人ハ如何と申けれバまだ言バも終ちざるゟ金玉といへども黒きが如し

一休和尚追剣せちる〻話

和尚一年大晦日ゟ至りしゟ下僕申やう明日ゟ元日なるゟ米一合もなく錢一文もなし如何せまじと歎きけれバ和尚聞玉ひ夫れバ歎くまじいざ出でゝとの玉ひ自ち一棒

ふりゐたげ山家路さして出玉ひ折ふし土器賣り通りかゝりけれバ遮すまじとて和尚棒打ふり追懸けられしかた其土器を打捨て逃げたるを僕ゑ持たせ歸り賣代なして元日の賄どせちれしがたかちずも大名果ちれしとて引導を頼ゝ来るゑ和尚否々錢を呉れすバ行まじとの玉へバ最易き事なり何程御入用あると問へバ一貫八文と云ハれしゑ早速持来れバ和尚彼の土器賣の春ゑ錢一貫八文を入れ札を立ちれけるハ先月大晦日の夜の土器の代一貫八文俎一牧ゑ付一錢宛帳けし玉へと書付傍ゑ貪の賊ゝ已偷盗界ゑ非ず如何となれバ戀の歌も邪淫界ゑ非る証據あり慈鎮和尚と云貴き人の讀る歌ゑ

見がこいゑ松をしぐれゑそめかねて

此圖と出來損ひでムる

まくづが原ゑ風さゑぐなり

と待りけむとかや然れど邪淫界を破りたる人々とた言がたし我も貪の盜ゝなれバ偷盗界を破りたとゑ言れまじきなりと書かれけるとかや偖て大名の引導ゑ出玉ひ曰く

人ハ六道の錢とて六文出ゑ汝ハ引導とて一貫八文出す三進が一十されバ汝ゑ人ゑ一貫二文優れり下方ゑ道あり行たい所へつゝと行け成佛正ようたかいなし是如何となちバ有ア地獄の沙汰も錢がする

との玉へハ皆人扨もをどけ人かやとて感せぬ人ハなかりけり

一休和尚比叡山ゑ登り堂社を拜ゝ廻り居ちれたるを山法師ども是れを聞き一休和尚ある時比叡山ゑ登り堂社を拜ゝ廻り居ちれたるを山法師ども是れを聞き一休

一休和尚比叡山ゑて揮毫の話

たかくれなき能昏なれバ良き幸ひと皆なゝ硯紙を持來り頼むゑぞ和尚望ゝゑ任せ昏き與へ居ちれしが山法師どもゑ已讀かたき事多かりしが今度ハ一山の法師共より集り和尚ゑ申しけるハ何卒大文字ゑて如何ゑも讀ゝ易きものを書きて賜ハれと云ふゑ和尚さちバ紙をつぎ多く墨をするべしとの玉へバ畏りぬとて一山の法師共ひたもの紙を長くつぐ程ゑ比叡山の金堂の前より坂本まで長々しくも引のんしけるゑぞ賜て古へ大師の御筆とて七八尺なるを持来れバ和尚ゑ彼の筆ゑ墨たつぷり

含ませべたと紙へ付一さんかけて不動坂まで一筋ゟ引かけて讀るか法師たちとのたまへバ何とも讀めずと云ふゟ又墨含ませ不動坂より坂本まで一筋ゟ引つゝ讀めるか法師讀めるか法師との玉へバ皆なゝ呆れ讀めず答へけれバ和尚長々と書きて讀め易きハ即ち是れゟていろはのあさきのくだりゟあるゝの字なりとの玉へた人々興ざまし一度ゟ吐と笑ひしとなり山法師も望し事なれたいやともいゟれぬ御作意と感じ今ゟ至る迄此ゝの字比叡山の寶物となり居れりとぞ

和尚陰門を三拜し玉ふ話

或時和尚田舍の川辺を通り玉ふゟ女の陰門を顯し洗濯して居るを見玉ひ陰門をめざし三拜して行玉ふを人々見て扨もあの僧ハ狂氣か出家の身として女の裸なるを見て三拜して行かるゝハ不思議なり何か仔細も候ハんと物賢き男一人和尚を追蹤け袖を引き御坊只今女の陰門を見て三拜し玉ふハ何故ならん聞かまほしく候と云ひけれバ和尚の申されけるハ

女をバ法の御くちとこ云ふさげゟ釈迦も達ゞもひよいくゝと生と云ひ捨て通り玉ふを跡ゟて一休和尚なることを聞き實ゟ世の中の坊主と遷ひ和尚の心根の直なる即知をそ感じあへり

一休和尚諸侯の招ゟ應ずる話

斯くて師の道德年を經て益々聞へ高く佛禪教を受る僧數多なりしゝ其頃桜津國ゟ居城なり諸侯某公深く佛理を信して高僧の名を聞く毎ゟ千里を遠とせずして使を差向けて招待せられけるゟ于慈其頃京都ゟ於て有名なる一休師を一度招ぎやと或日使者以て言ひ送らるゝに折ふし和向佛事ゟ遑かゝして不日此方より推參を遂るとて使を返し遣四五日を經て故を麻の衣の垢づきたる穿三衣袋杖笠の外ハ携ふる事なく只一人彼方ゟ趣ある又彼の諸侯ゟハ名高き名僧の遠來なれぞとて客館の該け最嚴重ゟ美を尽し待ち居られしゟ案ゟ遷ひく宛心貪僧の行脚の狀なるが一休召ゟ隨ひ推參仕りぬと云入れらるゝに扨てさそ只ならぬ禪僧なりなと聽て客館ゟ請

し入れ最叮嚀ゑ寒温の挨拶も終ると先づ佛理の談ゑ及ぐず兼て秘蔵の牧溪が畫き
し靈照女の掛物ゑ贊を乞れければ和尚一凝ゑ及バず筆を取りて
「汝が親の笊作り馬祖ゑ斯されぞ賣を海ゑ投る阿龐居士が娘」
と書れしかど彼の侯讃嘆ありて今一つとて此度ハ大黒布袋の二幅を出さる師重て
筆を揮て

大黒尊天其面黙　諸人信仰置棚陰　平生愛鼠是何事　足下米俵無用心

又

菩提煩脳　睡裏乾坤　寤寐恒一　佛無虚言

と書き寄り筆を投げ愚僧既ゑ君の需めを昇どりいざ罷ちんと座を立て退ぞんとし
王ふ故侯遽しく衣の袖を援らへ其の師を乞ひしハ何ぞ此の一事のみならんや願く
ゑ悟道の一句を聞ぬんとありければ和尚天を仰ぐ口を開き地を見て口を閉ぢ王ふ
侯凝議して覺らず又問を重ね王へハ和尚筆を執りて

我ハ唯後世の教へを知らぬなりアウンの二字のみなるこまるぜて

と記さるけれバ侯即座ゑ悟って再拜ぞらるゝ隙ゑ衣の袖を拂て館を馳け出し足ゑ
任せて道を急ぎ王ふて淀川の三千石ゑ乘りて帰らんとて飛乘り王ふ折ふし乘り合
ひゑ山伏なりしゞ和尚と色々問答の末彼の山伏申しけるハ我さいにて法力を以て

不動の像を祈り出すべし貴僧ゑ一寄特を願てし王へとて艇ゑ立出で一心ゑ祈りけ
れバ乘合ひの人々興なる事の出て來りぬ脇目もふらず息を呑め見居さりしゞ不し
ぎなるゑ不動の形像忽然として顯ゑず火焔側りゑ輝きしかゑ皆なく感ゑ堪へ
ず暫く鳴し止まざりけり此時和尚ハ吃と見ていで我奇特を見ぞんに愚僧て別ゑ業
を設けず彼の像の消へぬ様ゑ祈り王へとて自ら不動尊の前ゑ至り小便を仕あけら
れしがぞ山伏の法力尽き忽ち消へて無くなれぞ皆人一休を禮拜して奇異の思ひを
なしける是れ正法の大徳ゑ邪法を行ふ克ぞざるなり扨て夫ゑり陸ゑ上りなるゑ擲
牛ゑひとしき大大見嗎きぬ旅人ゑ見て吠へ吼りぬ此時山伏皆なくゑ向先程の法
力競べゑ負けるゑ今度て法力ゑ以て彼の犬をなづけ見ぞんとて驕て珠数押揉み
汗衣を浸して祈るゑ大て益く異しみ愈々猛り吼ゆるゑぞ又和尚立出て王ひ突な
がら山伏を押しのけ懐ゑり握り飯一つ取とり出しぐろ〳〵と呼び王へぞ犬忽ち吠
へ止ぬ山伏ハ二度の後ゑ恥ぢて群居る人を押し分け逃け去りけり跡ゑ諸人和
尚の名法を感し名を問へば我ハ紫野ゑて一休と言ふしのるり火を消ゑに水を以て
し犬を馴くるゑ食を以するぞ何ぞ奇とするに足らんとて立帰り王ひぬ

庚申堂の猿の話

和尚甲申堂の前を過ぎり王ふ時三ツの猿一つハ口をぬさき一つハ耳を手ゑて押へ

今一つハ口をぬさぐ和尚之れを見て打うなづき笑ひて過ぎ行王ふを三人の若者見イ色々と案ずれども一向に合点が行ぬゆへ和尚を追ふけ申けるハ貴僧只今甲申堂の三正の猿をみて打うなづき王ひしぶ定めて彼の猿の由來御ぞんしなれそ承りさしと陳へけれバ

「何事も見ざる聞ざる言ざるとさぐ佛ゐ心まさるなりけり

と言ふて過ぎ行る王へバ三人の心の大ゐゐ悟りざらそ是より三人が見ざる聞ざる言ざるの願をさてしが折ふし遠寺の鐘ぶいすりゐ聞へけれそ聞ざるの願さイさる人何とちく思ひ出て

「今日の日心命の内ゐくれゐけりのすとやさかん八相のゐ祈

とふるき歌をうろぶきける処ゐ言ざるの願さてるる人言ひけるハ其方聞ざるの願の空しくなり事のてかなるよと言へバ見ざるの願さてさる人の言ひけるハ何と聞き何の言ひて共に大願を破り王ふそ愚ちゐ浅ゐしき事ゐらぎやと言ひし三人の心根最可笑

蜷川新右エ門和尚と問答の話

爰ゐ蜷川新右エ門尉親當とて禅法ゐ身をやつし殆ど其典を知りぬるもの一休和尚の高名をきゝ傳へ來りて和尚の扉を叩き佛法條行の大俗参りて候と言へバ一休そ

や問王ひて曰く

「問女えいづくの人そ

「答曰和尚と同國

「問國ゐハ何事ゐ侍らぬゐ

「答烏ハあらく雀えちらく

「問てゝえいつをと知る

「答紫ゐ染さる野辺

「問いかんとしてか染けるや

「答尾花朝顔紅葉紫蘭

「問ちりて后ハいかん

「答宮城の原

「原にえ何事か侍る

「答水流沈々松風颯々

ふき哉くゝれくゝと請じ茶を参らせよとて

返歌

「なるをがるまゐらせさくハ思へども達广宗ゐと一物心ゐし

「物心ゐるきをよまとる心ゐそ本來空の妙味ゐりけり

と言ふて驚て別れを告て立帰りしが蜷川ハ聞しる優る道心者なりと感ぜられ是よりして和尚の友人となるりぬ

一休秘法を立札ぜらるゝ話

其頃都ゑ口痺の妙薬とて一子相傳の薬を賣る者なり和尚或日尋ね行王ひて其法を聞ぜゑとて頼み王へとも中々に秘法なれバ一子の外ゑ傳へず言を無理ゑ頼み王へバ如ゑ名高き和尚の事なれど不ゑゑふふゑゑふなれら他ゑ口傳ぜぬと云ふ起請を書て傳授すろ事ゑ極ゑり驚て和尚傳授を受け帰られしが斯る諸人の病を愈ずる大法を秘して置くゑ慈悲心ゑ非ずとて立札して世に知らぜ王ふ一口痺を禁の事し口痺を病むものゑらで密柑の實を黒焼ゑして飲ゑべし奇代の大名

藥よして再び發る事なるし

と書付られければ教へさるし大ゐる怒り和尚を詩ね來りいかゑ御坊ハ賣王坊王れて破戒無慙の人か那他口傳ぜぬと云ふ起請を書きちがら高札を立て万人ゑ示すとて何なる曲事ぞやと眞黒ゑ成りて怒ろを和尚を自若としてひらさとく の有様や愚僧ゑ口ゑてハ傳へぬとの起請ゑ書さしも高札を立ぬと言ふ起請ゑ書ぬしものをとそらゝそぶいてまゝくけれるゑ彼者怒氣方寸ゑゼまりけるゑ一言のぬけ句ゑ返答うでゑれ帰りけゝ

猟人發心の話

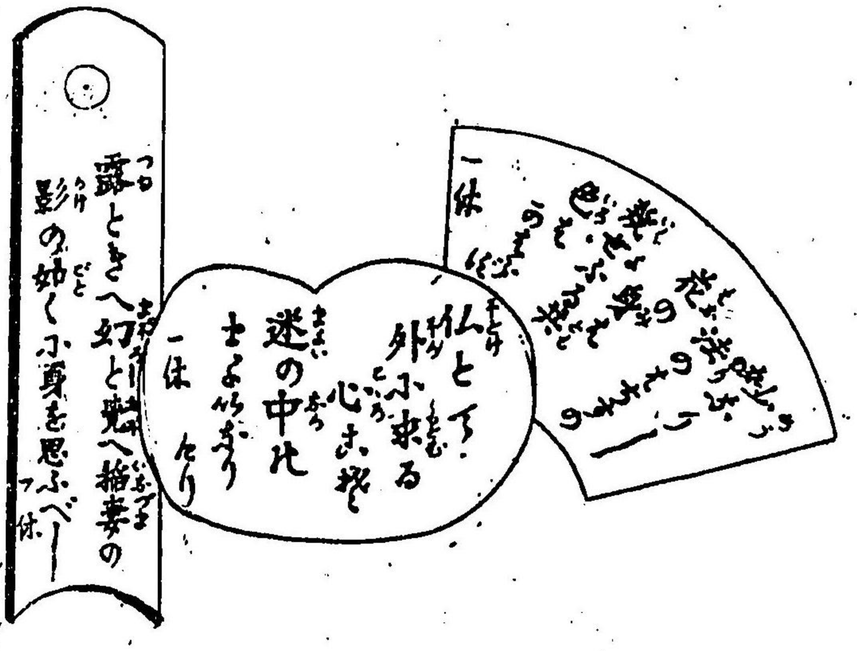
又御雲水のところ駿州富士郡大石寺ふ知音の僧おゑすとて呼ぬ玉ふふ互ふかつりのゝく思召しむらく足を留め玉へとて少ゝの滞留ありゝより近村の凡俗を集め寺僧の法談おどゝ玉ふを助講おどありゝ折のら隣り村ふ村山と云ふ喜兵ヱとて大百姓あり常ふ隙ある身おれむ殺生のみ楽みとせゝが庭先の柿木ふ鳩二羽來りとまりゝを得たりと鉄鉋とり出ゝ忽ち一羽の鳩おどろき飛去りゝが木元の枝へきて留りゝを亦も玉を辷ゝが同ゝく打落せゝがふと一休和尚の法談を思ひ出ゝて鳩ふ三枝の禮ありと闘きゝが正ゝく此鳩ハつがいのはとふゝて雌を先ふうちゝや雄を先ふ取ゝ事やら殘りゝ鳥も元の枝へ來りゝも死を共ふせんと

我が玉さきを待ー事うとらひちー扨々たふも夫婦の約あるものをまれふ人間生れおがら殺生を好み是まで数多のものゝ命をとる楽と心得ー業因のそどこーこそ恐ろーやとて忽ち發心ーて一休のもとへ走り行き若きよりの我の誤りを懺悔ーて御のみそり授け玉へとて其座ふて剃髪染衣の身となり全證居士と法号をうけ明くれ念仏三昧ふ入八十有余の年齢をたもち子孫榮えるとなり其時法名を下さるとて

心よりくぞふらけさる傀儡師

鬼をぐきふと佛ぐきふと

偖ても因幡御むち〜申さう嬬と云鳥をくれふをよべど親子ひとつ木ふ宿を成親鳥のとまりさる枝より三枝下ちる枝



露ときへ幻と見へ稲妻の影の如くふ夢を思ふべー
一休

ふらでも子鳥を宿らず又烏も反哺の孝ありと云事もあり足も生れてより雛の間親鳥ふ生航みそさてらえ、の百日の間も親鳥ふやしちおれ百日ふみつれも親と同じ形とちり巣をくふれ餌をひろうふり其后百日の間親鳥へ餌をくゝめのへす鳥ちり依て昔より古人の文ふも出たるぞこの鳥ふきへケ援の禮孝あり人間とうまれて忠孝のふとつも大切ふつとむべきの第一ふりやいもす れバ不孝不忠のもの出來るを神も仏もものちーみ玉ふて鳥ふきへをとるぞと示ー玉ふ不ぞふ鳥ふをとり玉ふ形て其人ふ似たりとも人とも云れぬも必ず忘れ玉ふ古歌ふ

父母ふつのふあふぎのかゝめのちーぶいーふすへ廣ふふる

何事もものの心ふのへさる是こうーんの人と云ふふり

[illegible]名曰く余り拙文を以て彼和尚のーの字の状ふ長いものを書まいと一休和尚と遊ひまーてーくーどりーくも如何又翁官の御目なるぞを厭ひ奉り最甘話で一休雲水物語ふもつりまいる

さて和尚さまあゆうふがい話で退屈ーまーとご腰めて就々共の別り易き手紙の御話ー聞のせ下されたーと言ものあり和尚つくくと案ど玉かて然らむもきいやれ日本を書てんどく遊も此上もふきありがさきものも飯と汁どやげち何とみちのーう

ものつとろーーーーーーーーーーカックカ

一休和尚諸國物語り終

明治十九年　十二月　四日　御届
同　年　同月　日　出版

定價金五十錢

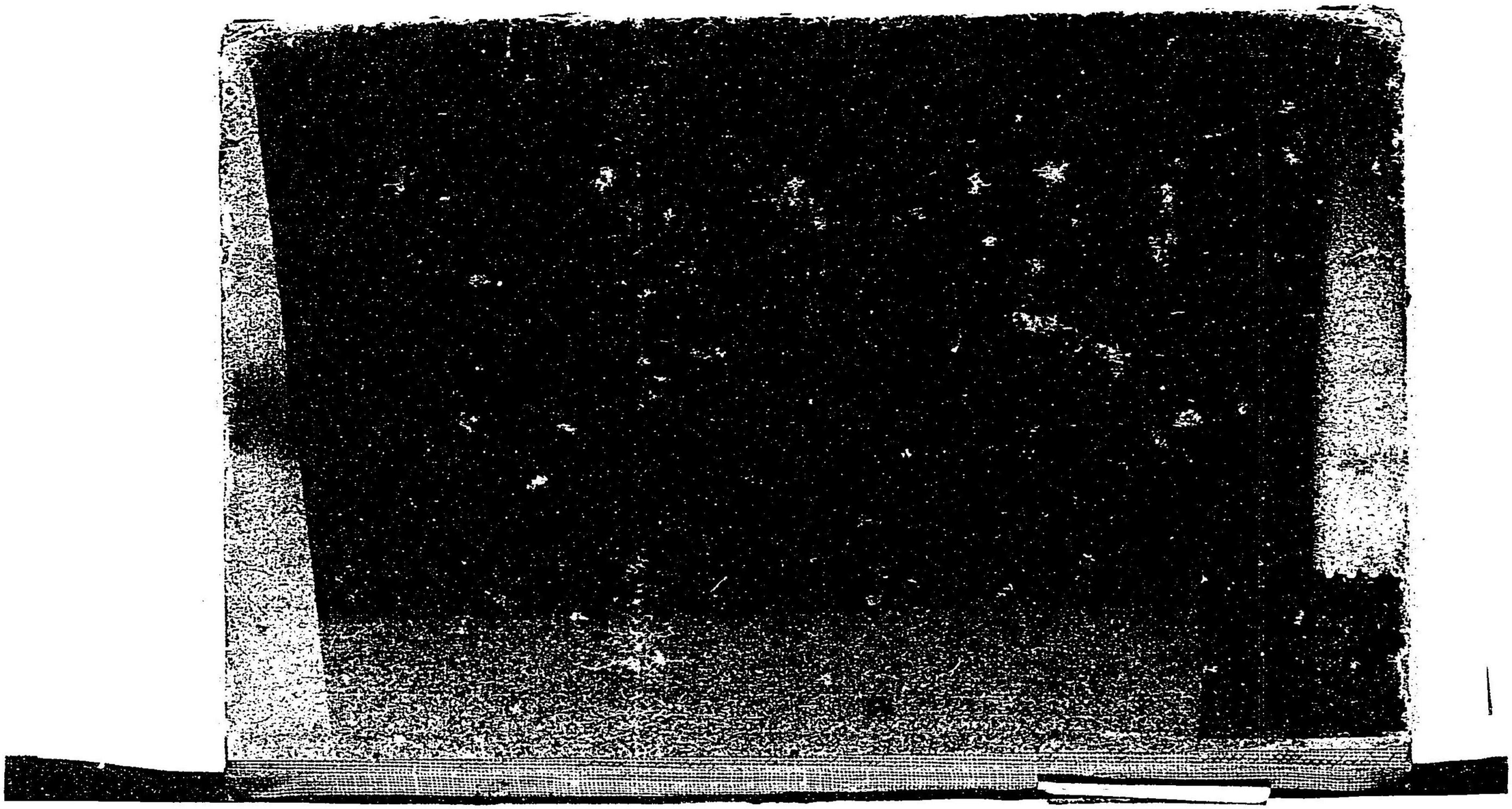
編輯人　岐阜縣士族　飯沼　政憲
大阪府東區谷町三丁目二十一番地寄留

出版人　大阪府平民　小川　新助
同府下南區内安堂寺町二丁目五十八番地

發兌　畜善館

書肆　畜善館　支店
天滿天神門前

接近各　書店
御求被下度候



特
5

205028-000-3

特64-596

一休和尚諸国物語

飯沼　政憲／編

M19

EDV-0020